

# 「子ども理解」を基盤とした

## 子どもたちが実感を伴った理解を目指す授業実践

鈴木 開登  
教育方法開発コース

### 1 テーマ設定の理由

教育現場では日々、児童や学校の実態、指導の内容に応じた「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が推進されている。中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（令和3年1月）では、急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力について、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要」とされており、先行き不透明な「予測困難な時代」に生きる子どもたちの「生きる力」の育成が強く求められている<sup>1)</sup>。そのためには「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたさらなる推進が必要である。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、文部科学省は「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」において、子どもたちが主体的に学び続けるための授業像の一つとして、「一つ一つの知識がつながり、『わかった!』『おもしろい!』と思える授業」を例示している<sup>2)</sup>。子どもたちの頭の中で一つ一つの知識をつなげ深く理解させ、自らの考えや意見を形成できることに面白さを感じる授業。つまり、子どもたちの「できた」「分かった」が溢れる授業を目指すことが、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業の一つの形として求められていることが分かる。

本研究では、小学校国語科に焦点をあて、子ども理解を基盤としながら、上記のような授業実現のため、子どもたちが実感を伴った理解を目指す授業の指導方法について、必要な手立てや支援を考察しながら論究していく。

### 2 基本的な考え方

#### (1) 子ども理解について

教育学者の津守真は、「理解するとは、『子どもの表現を自らの表現の可能性として受け取り、そこで理解された意味を、自分と他人に共通のことば、あるいは伝達可能な行為に移すこと』」と述べており、<sup>3)</sup> 子ども理解が教師と子どもの相互関係に基づいて成り立つことを示している。同じく教育学者の上野ひろ美は、実践における子ども理解の4つの視点として、①表情・しぐさを読む、②言葉を読む、③活動の文脈でとらえる、④子ども相互の関わりを読む、を挙げている<sup>4)</sup>。これは学校生活において、教師が子ども理解を深めることができる場面は、多岐にわたって存在していることを示しており、それらの場面の中で、教師は子ども一人一人の表情やしぐさ、言葉などから、子どもの表現を読み取り働きかけることで、子どもの内面を見ることができると考えられる。

## (2) 実感を伴った理解について

「実感を伴った理解」について、筆者は以下2つの方法を考察した。1つ目は昨年度の研究から、学習内容に対し子どもたちが「できた」「分かった」という実感を伴うことで理解を深める方法。2つ目は、教育者の鳥山敏子の授業実践<sup>5)</sup>と国語教師である武田常夫の考え<sup>6)</sup>を基に、学習内容に対し子どもたちが「イメージ」できるという実感を伴うことで、理解を深める方法である。以下の図1に筆者の考える「実感を伴った理解」を促す方法をまとめた。

1. 子どもたちに「できた」「分かった」という実感を伴った理解を促す方法
2. 子どもたちが学習している内容に対して、「イメージ」を持つ、膨らませることで、「実感を伴った理解」を促す方法

図1 筆者が考える「実感を伴った理解」を促す方法

## 3 実践の概要

### (1) 主題に迫るための手立て

#### ① 子どもたちに「できた」「分かった」という「実感を伴った理解」を促すワークシートの作成

小学校第5学年国語科「言葉の意味が分かること」を学習する際、原因と結果の関係性について学習する機会があった。そこで筆者は、図2のようなワークシートを作成し、原因と結果を見分ける簡単な練習問題を数問用意した。練習問題を設定した理由として、多くの子どもたちが練習問題を解くことで、原因と結果を見分けることが「できた」という「実感を伴った理解」や、原因と結果の関係性について「分かった」という「実感を伴った理解」を促すというねらいがある。

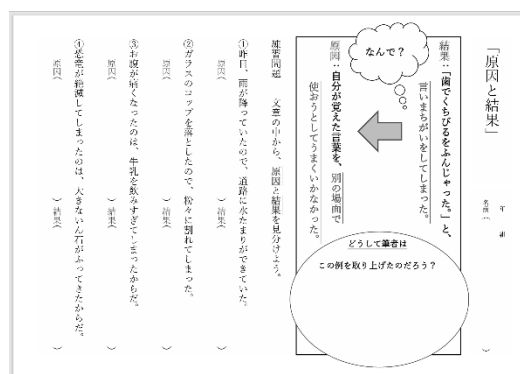


図2 「原因と結果」のワークシート

#### ② 子どもたちに「イメージ」による「実感を伴った理解」を促すための具体例の設定

小学校第5学年国語科「言葉の意味が分かること」では、①でも触れた「原因と結果」の関係性の他にも、「見立てる」ことの意味や、言葉の意味を「点」として理解することと「面」で理解することの違いに関する説明など、少し抽象的な内容を学習することになる。

そこで筆者は、子どもたちが「イメージ」を持つ、膨らませることができ、「実感を伴った理解」を促すために、ア「あやとり（ほうき）」の具体例、イ「回転ずし」の具体例、ウ「ゲーム」を題材にした具体例、エ「ある飲食チェーン店のニュース」の具体例、オ「とん汁」の具体例、カ「消しゴム」の具体例、の6つの具体例を用意した。これらの具体例を用いて、「イメージ」が子どもたちに「実感を伴った理解」を促すことができるかどうか検証を行った。

#### 4 実践の考察

(1) 子どもたちに「できた」「分かった」という「実感を伴った理解」を促すワークシート

筆者の用意した「原因」と「結果」の文を見分ける練習問題について、多くの子どもたちが難なく解答することができていた。筆者が子どもをランダムに指名し、練習問題の答えを聞いている時も、「僕が答えたい!」「指されたいな。」という声が子どもたちの方から聞こえていたほどである。彼らは、この「原因」と「結果」を見分けるということに対し、授業で学習した内容や既存の知識を生かし、解答することが「できた」。さらに「結果」には必ず「原因」があるという、「原因と結果の関係性」が「分かった」という、「実感を伴った理解」を得ることができた。

(2) 子どもたちに「イメージ」による「実感を伴った理解」を促す具体例の設定

第3節で先述した通り、筆者は6つの具体例ア～カを設定し、「言葉の意味が分かること」の授業内で、これら全ての具体例を提示した。それを踏まえ、単元終了後、31名の子どもを対象としたアンケート調査を実施した。以下表1～3はアンケート調査の結果をまとめたものである。

表1 子どもたちが一番面白いと感じた具体例

質問項目	授業の中で、一番面白かった例はなんですか?ア～カから一つ選び、その理由も教えてください。						
回答項目	ア「あやとり」の例	イ「回転ずし」の例	ウ「ゲーム」を題材にした例	エ「ある飲食チェーン店のニュース」の例	オ「とん井」の例	カ「漬しぼり」の例	
結果	1票	14票	2票	7票	2票	6票	
理由	・「見立てる」ということを、身近なものを例として説明している、分かりやすかったから。	・要約と要旨の違いを、回転ずしに例を挙げて説明している、分かりやすかったから。 ・一番身近な食べ物だったから。	・一つの「ゲーム」という言葉から、たくさん例を出して説明してきて、分かりやすかったから。	・今ニュースでやっていることと結び付けて考えたから、分かりやすかった。 ・最近に起きた事を例にだしていたので、話題に入りやすかったから。	・「飲む」と「食べる」の「境界線」を例に挙げて、分かりやすかったから。	・身近なものであること、「面」がしぼりこまれていない状態で、「漬」がしぼりこまれていることがよく分かったから。	・「見立てる」ことを、あやとりのほきと、本物のほきで比べたから分かりやすかった。 ・身近なあやとりを例にして、「見立てる」ということを説明している、分かりやすかったから。

表2 子どもたちが一番分かりやすかった内容

質問項目	授業の中で、一番分かりやすかった内容は何ですか?①～④から一つ選び、その理由も教えてください。			
回答項目	①「見立てる」について 具体例「ア」	②「要旨と要約の違い」について 具体例「イ」	③「原因と結果」について 具体例「エ」	④「言葉の意味が分かること」について 具体例「ウ、オ、カ」
結果	8票	1票	19票	3票
理由	・「見立てる」ことを、あやとりのほきと、本物のほきで比べたから分かりやすかった。 ・身近なあやとりを例にして、「見立てる」ということを説明している、分かりやすかったから。	・誰でも分かるような物(回転ずし)で、具体例を挙げていて分かりやすかった。	・結果があれば原因もあるし、原因があれば結果があるというのが分かりやすかったから。 ・練習問題があって、練習することができたし、身近に使われていることだから。	・言葉の意味が分かることでは、小さい子の言い間違いをしてしまったなどの具体例が多かったから。

表3 子どもたちが一番分かりにくかった内容

質問項目	授業の中で、一番分かりにくかった内容は何ですか?①～④から一つ選び、その理由も教えてください。			
回答項目	①「見立てる」について 具体例「ア」	②「要旨と要約の違い」について 具体例「イ」	③「原因と結果」について 具体例「エ」	④「言葉の意味が分かること」について 具体例「ウ、オ、カ」
結果	8票	14票	2票	7票
理由	・「見立てる」も具体例があったけど、あやとりは色々なものに例を挙げて説明してきて、まて簡単だったから。 ・もう少し具体例をあげてほしかった。	・「要旨」と「要約」の違いが分かりづらかったから。 ・「要約」の意味は少し分かったけれど、「要旨」について少し分からなかった。	・少し説明が分からなかった。	・一つも言葉から複数の意味が出てきて、訳が分からなくなりましたから。 ・学習する内容が多かったから。

表1～3のアンケート結果を受け、筆者は以下二点について考察した。

一点目は、具体例の「面白さ」と「分かりやすさ」に相関関係はないという点である。表1の結果で、子どもたちが一番面白いと感じた具体例は、「イ、『回転ずし』の例」であったが、表2では一番票数が少なく、表3では一番多いという結果であり、子どもたちにとって一番分かりにくい内容であった。この結果から、具体例が面白くても、それは子どもたちにとっての内容の「分かりやすさ」には繋がらない、繋がりにくいということが分かった。今後は、具体例の「面白さ」に加えて、子どもたちが「分かりやすい」と感じるという視点からも、考察を進めていきたい。

二点目は、「イメージ」による「実感を伴った理解」を促す方法だけでは、不十分であったという点である。表2、表3の結果に注目すると、子どもたちにとって一番分かりにくい内容は、「②『要旨と要約の違い』について」であった。その一方で、「③『原因と結果』について」は、子どもたちにとって一番分かりやすい内容であったことが読み取れる。

では一体、この違いはどこから生まれたのかと考察したところ、同節の（１）で示した子どもたちの「できた」「分かった」という「実感を伴った理解」を促す方法を、子どもたちが一番分かりやすいと感じていた「③『原因と結果』について」で、練習問題という形で取り入れていたことが見出された。一方、子どもたちが一番分かりにくいと感じていた「②『要旨と要約の違い』について」では、それを取り入れていなかったことに気付いた。つまり、「イメージ」による「実感を伴った理解」を促す方法と、「できた」「分かった」という「実感を伴った理解」を促す方法の両方を行うことで、子どもたちの「実感を伴った理解」により強く繋がるのが分かった。この二つの方法を今後も実践しつつ、子どもたちの「実感を伴った理解」を目指す授業実践を続けていきたい。

## 5 成果と課題

今回の研究で、「イメージ」による「実感を伴った理解」を促す方法が、有効的な手立ての一つであるということが分かった。具体例を作成する際、子どもたちに「イメージ」を持たせる、膨らませることで、「実感を伴った理解」を促すため、子どもたちが身近に感じる題材を選んだ。そして、授業内で具体例を実践することで、効果的に子どもたちの「実感を伴った理解」を促すことができた。さらに、子どもたちの「できた」「分かった」という「実感を伴った理解」を促す方法も実践したことで、改めてその方法の有用性と、「イメージ」による「実感を伴った理解」を促す方法と合わせて使うことで、子どもたちの「実感を伴った理解」をさらに促すことができるという成果を得た。

その一方で、子どもたちが学習した知識の、分かり直しをする機会がなかったという課題も見つかった。練習問題やワークシートを用いて「できる」こと、子どもたちに「イメージ」を持たせることで、「わかる」ことへと繋がることを意識したが、それとは別に「わかり直す」場面を、授業内に設定することができていなかったことが課題として挙げられた。

特にこの単元で新たに学習した「要旨」の書き方については、何度も繰り返し行うことで、少しずつ子どもたちにも身に付いていくような知識である。それに対し、今回実践した授業で、子どもたちは学習のまとめとして一度しか「要旨」を書く機会がなく、「要旨」について「わかり直す」場面が与えられていなかった。今後は、「わかり直す」場面というのを、単元の中もしくは別の単元、別の教科でも行えるよう留意し、授業計画を立てていきたい。

## 注

---

1) 中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』, (2021), p.3.

2) 文部科学省「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」, (2017), p.12.

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/newcs/\\_icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128\\_mxt\\_kouhou02\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/_icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128_mxt_kouhou02_01.pdf) (最終閲覧日：2024年1月12日)

3) 津守真『子どもの世界をどうみるか』(NHK ブックス, 1987), p.15.

4) 上野ひろ美『『子ども理解』に関する教授学的考察』, (1993), pp.82-85.

5) 鳥山敏子『イメージをさぐる からだ・ことば・イメージの授業』(太郎次郎社, 1985), p.41.

6) 武田常夫『イメージを育てる文学の授業』(国土社, 1992), pp.15-16.